

幼小連携接続問題の実践的研究報告

－ 児童間交流・教師間交流の取り組みを中心に －

河崎 道夫*¹・朝田かおり*²・北谷 正子*³・杉澤久美子*⁴・西原 信孝*⁵

藤本 尚*⁶・松本 敬子*⁷・山崎 征子*⁸・山田 康彦*⁹・吉田 京子*¹⁰

全国的に幼稚園（あるいは幼児期）と小学校の連携と接続問題が取り組まれるようになっていっているが、本研究では、この問題に実践的にアプローチする。全体の課題の柱を①児童間交流と教員間交流、②教育課程の再編、③養成課程の改革として立てたが、今回はまず遊びや表現活動などを中心に児童間の交流の取り組みを進めそれを基盤に教員間の交流を進めた。その結果交流実践における具体的な児童の姿を共有しながら双方の教育観、児童観を確かめながらこの問題に取り組むことの重要性が明らかになった。さらに教育課程の接続に向けていくつかの手がかりが得られた。

キーワード：幼小連携、幼小接続、教育実践、児童間交流、教師間交流

I. 問題

幼稚園教育と小学校教育の連携接続の問題は、幼稚園教育要領が1956年に制定されたときから存在していたとされる（鈴木ほか1989）。以来様々な観点から様々な形で取り組まれてきたようであるが、学習指導要領と幼稚園教育要領の性格と内容の違い等などの背景もあり、制度そのものの変更も意識されないまま全体としては広がりとも深まりをもった実践研究には進んでいなかったものと思われる。しかしながらここ数年は実際の子どもの姿の問題として両者の教育内容や方法の継続性は緊急で切実な課題となりつつあるといえる。

近年、家庭や地域における子どもの育つ環境が大きく変化してきている。少子化、地域の仲

間集団の縮小、地域的な子育ての共同の衰退などにより、生活と遊びの中で実体験を通して自然や社会的関係を学ぶ環境が衰退しつつある。生活と学習の主体者として育つ基盤が変貌してきている一方で、親たちをはじめとした国民の、子どもの育ちや教育に対する期待や要求、価値観と行動も多様化してきている。虐待や放任、「知識」教育への過度な要求とそれへの反発、「のびのび育てたい」意識と「きちんとしない」と大変なことになる」意識など、それぞれに様々な程度で混在し合っているのが現状であろう。場合によっては公教育への不信と、商業的な教育への過度の依存も見られると言ってよい。

このような状況は、成長過程のあらゆる年齢段階で様々な問題となって現れているが、幼年期あるいは小学校低学年の子どもたちにおける教育困難もその一つとして指摘されるようになっていっている。集団的生活になじめない、衝動的に人や物に暴力をふるう、集中して遊びや学習に取り組めないなど、その場で目に見える行動問題が目立ってくる一方で、「過剰適応」と言われるように「言うことはよく聞くが大人の評価を気にし過ぎる」「自分を思いきり出すことができない」「遊べない」など、後の成長過程で別の形で現れる可能性をもった問題も指摘されて

*1 三重大学教育学部幼児教育講座
*2 三重大学教育学部附属小学校
*3 三重大学教育学部附属幼稚園
*4 三重大学教育学部附属幼稚園
*5 三重大学教育学部附属小学校
*6 三重大学教育学部附属小学校
*7 三重大学教育学部附属小学校
*8 三重大学教育学部附属幼稚園
*9 三重大学教育学部美術教育講座
*10 三重大学教育学部附属幼稚園

いる。大人や他者に対する基本的関係や対象世界への態度や行動において、すでに入園前、入学前から社会的背景をもった問題を抱え、入園後、入学後もそれを継続している子どもたちを、幼稚園や小学校でどのような形で受け入れ、保育・教育をしていくのか大きな課題となっているといえよう。

こうした課題に対しすでに、保育園や学校では、地域や親との連携、教育課程の改革、教師の指導や援助のあり方等において様々な改革の努力が行われているところである。幼稚園では1989年、及び1998年の2度の教育要領改訂で、ある種の揺れ動きを見せながらも「教え込み」や「強制的な」指導を排し、遊びの中で育つことを中心としてそのための指導援助のあり方を模索してきた。小学校では1992年より「生活科」が開設され2002年には「総合学習」の時間が始まった。従来の教科枠にとらわれない体験的で総合的な学習活動が進められるようになっている。また幼稚園、小学校とも地域や親との連携が取り組まれるようになってきている。

同時に問題が個別の行動修正や学習のつまづきの解決にとどまらず、仲間と共にどう生活を送るのか、他者との関係をどう豊かにしていきながら、生き生きとした知的活動をどのように体験していくのか、そして子どもたち一人ひとりが自らの個性と年齢段階にふさわしい自我のありようをどう実現していくのかという、生活と教育の基本的問題であるならば、それぞれに改革の努力を進めていけばよいということではないだろう。幼年期、小学校期の全体を通して、さらにはその前後も含めて、必要で新しい教育の形態と内容についての一貫した取り組みが重要になってくるだろう。とりわけ小学校入学前後では、子どもたちは異なった施設、異なった人的環境、異なった教育内容に急速な移行を経験する。この急速な移行にあって、それを一見「スマートに」あるいは「たくましく」乗り越えてしまう子もいれば、逆にそこでつまづき乗り越えられずに「不適応」とされかねない子もいる。先に見た子どもたちの問題状況に照らしてみれば、この急速な移行が単に一時的な困難

をもたらすだけだという楽観は根拠がないように思われる。

もちろん一方で、教育制度として一定の区切りがあることによって子どもたちの発達成長への意欲が生み出されることも確かであろう。幼児期の教育を「卒業」したことや新たな段階へと進むことの誇りや自信をバネに生活の送り方を変え、学習活動に意欲的にとりくむようになることもまた重要なことである。したがって問題はいわゆる「段差」一般を解消することではない。今日の子どもの状況をふまえ、急速な移行の負の部分为解决しながら、「段差」を越えることの積極的な意味を新しい形で実現していくことが求められているのである。

本研究は、こうした問題意識に立ち、取り組み可能な実践を進めつつ幼稚園と小学校の接続連携をどのようにはかっていくかを主題とするものである。

実践研究を進めるにあたり、課題を以下のように大きく三つに分けて設定した。

1. 交流

- (1) 児童間の交流
- (2) 教師間の交流
 - ① 人事交流制度改革
 - ② 情報交換の制度化
 - ③ 教師間交流

2. 教育課程の改善と創造

- (1) 教育内容と指導実態の把握……問題領域と項目設定、及び調査
- (2) 先進例の調査研究
- (3) 教育課程の改革案の作成と実践

3. 養成課程の問題

もちろん最終的に解決すべき課題は、新しい教育課程の創造と実践であるが、教師養成課程の改革とともに、学習指導要領や免許法など制度上の諸問題を含んでおり、短期間で成果をあげることは困難が予想される。そこで、着手可能な条件のある「児童間交流」「教師間交流」から始めることとした。本稿はこの「1. 交流」についての実践の経過と成果を紹介しながら次の段階への展望を探るものである。

II. 実践の経過と考察

1. 児童間の交流

(1) 本研究協議会が発足する前年の2001年度から試行的に行われた取り組みも含め、経過の概要を以下に示す。

<2001年>

- ・6月7日：小学校4年B組の招待で、幼稚園年長児と小学校体育館で「しっぽ取り」を遊ぶ
- ・11月1日：幼稚園年長児と小学校1年A組 小学校体育館、1年生の考えたゲームを遊ぶ

<2002年>

- ・2月22日：小学校4年B組が幼稚園で人形劇を見せる。全園児鑑賞
- ・3月13日：小学校6年A組の体育授業をの 幼児の見学
- ・6月：幼稚園で飼っていたウコッケイの一部を小学校に移動させる
- ・6月22日：幼稚園のカレーパーティーに卒業した小学校1年生を招待
- ・10月4日：幼稚園において小学校1年による手作り楽器の演奏発表

(2) 代表的事例

①小学校から見た交流実践

●4年生「しっぽとり」を幼児と遊ぶ（2001年6月7日を中心に）

学期始めに「どんな4年生になりたいか。」と聞くと、子どもたちは、「年下の子に優しくできて面倒をみる4年生。」とも答えてきた。特に、1年生や幼稚園の子どもたちとかかわりを持ちたいという思いを持っていたので、総合的な学習の時間で、1年生や幼稚園との交流できるような学習を組んだ。

この学習には2つの流れができた。1つは遊びを通して交流したことである。2つは、人形劇を通して交流したことである。

ここでは、幼稚園児と小学生のふれあいが多かった遊びを通しての交流を紹介する。

4年生の子どもたちは、幼稚園の子どもを

「やさしく面倒をみたい」と考えていたが、実際に弟妹が幼稚園ぐらいいる子どもたちから「そんなに簡単に面倒みられない。」と言っていた。話し合っていくうちに、まず遊びながら仲良くなろうという考えが出された。

そこで、幼稚園児の年長さんではどんな遊びが流行っているか、幼稚園の先生や幼稚園にいる弟や妹に聞き取りをすることになった。幼稚園の先生に聞き取りに行くのは、休み時間や放課後に行った。先生や弟妹から聞き取った遊びは、「しっぽとり」であった。「しっぽとり」とは、洗濯ばさみにひもを付けたものをしっぽに見立てて、ズボン後ろに付けて取り合う遊びである。

遊びが決まったので、小学校体育館ですることとし、簡単なルールを決め、しっぽの製作に子どもたちは取りかかった。

ルールを話し合っているときに、「幼稚園の子どもたちは、体育館の場所を知らない。」と意見が出て、迎えに行く役割の子どもが決まっていた。また、ルールを説明する役割、司会進行する役割、しっぽにいる材料を集める役割などが決まっていき、一人一役になるよう自然に話し合いがなされた。

当日、迎えに行き、体育館でルール説明を4年生がしていくと、年長の子どもたちは、はしゃぐことなく静かに聞いていた。小学校の体育館に入って緊張したのであろう。4年生が「しっぽとり」をすることを説明しだしてからは、緊張もほぐれ「早くやりたい。」という気持ちになったようである。

「しっぽとり」は、2回戦を行った。1回戦目が始まると、幼稚園児の素早さに4年生が戸惑い、たじろぎ、どんどんしっぽを取られてしまった。4年生は相手が年下だから「簡単に勝てる」と考えていたようである。最後までしっぽをとり続けて残ったのは、幼稚園の女児であった。

1回戦の中で幼稚園児が、しっぽを舐めて取りにくくしたり、ズボンの中に隠したり、自分のしっぽが取られてもその前に取ってあったしっぽをズボンにつけたりして、遊ぶ姿が

あった。これは4年生が考えていたルールには無く、反則とは言い難い遊び方であった。

4年生は、ここで初めて幼稚園児の力強さに出会ったのである。2回戦を始める前に、司会進行の4年生がルールの付け足を説明し、前述の行為はしてはいけないことになった。2回戦は、やっとのことで4年生が勝ち残った。

遊びが終わって帰るときに、幼稚園の子が「楽しかった。」と言ってくれたことや握手をしたこと、「さようなら」と大きく手を振ってくれたことで4年生も満足していった。

さらに、教室に戻って今回の交流について話し合った。「遊んでみてどうだったか。」と聞くと、「楽しかった」という意見のほかに「幼稚園児は手強かった。」という意見が多かった。次に、「またしっぽとりをしたいか。」を聞くと、「ちょっと考える。」「もういい。」と言ってきたので理由を聞くと、自分たち4年生にはこの遊びは不利であることを2つ言ってきた。1つは、背の高さが違い4年生のしっぽは幼稚園児の目の前にあるということであった。2つは、幼稚園児の方が遊び慣れていることをいってきた。

そこで「これからどうするのか。」と聞くと、「今作っている人形劇が完成したら幼稚園に見せに行きたい。」や「幼稚園の運動場でダンボールを使ってテーマパークをつくりたい。」と答えてきた。話し合いを進めていくと、人形劇をしていくことにまとまっていった。そして、3学期に人形劇を見せていったのである。

蛇足であるが、この4年B組の子どもたちは、4年全体で活動する学年活動で「しっぽとり」を提案し、ルールを改めて作り直し、A組、C組の児童と共に遊ぶ姿が見られた。

②幼稚園から見た交流実践

●1年生の手作り楽器の演奏鑑賞から遊びへの発展

＜2002年10月4日＞

教育実習の期間に教生が授業を展開していく中で幼稚園児に聞かせたい・聞かせてやる

うということになり、年長児が1年生の活動に参加させてもらうことになった。1年生の訪問を受けることになった園児達であったが、聴かせてもらうという受け身の活動にどういう姿を見せるか教師としても興味深い所があった。

1年生達が静かに入ってくる中で知った顔を見つけて関心を持つ子ども達の様子が見られ、手に持つ手作り楽器に関心を寄せながら「とっこハム太郎」「輪になっておどろう」「となりのトトロ」の3曲を次々に聴かせてもらった。教師は園児達の質問や疑問を拾い1年生に尋ねたり、1年生達の自慢の楽器を見せてもらい音を聞かせてもらうという交流の中で、昨年の年長児達が胸を張って楽器の説明をしてくれたり音を聞かせてくれる姿をきちんと静かに受け止めている年長児達に大きな期待が育っていると感じた。特に、顔見知りの1年生がビュンビュンごまを楽器として鳴らしている姿に出会い、誇らしげに楽器を鳴らして見せてくれる様子が魅力的だったのだろう、拍手で応じていた。

時間的に制限のある1年生たちは、一連の活動の後予定時間になり学校へ戻っていったが「せんせい！僕たちまだ聞きたいことあったのに当ててくれなかった！」と年長児達からまだ交流を求めている言葉を聞き、もっと余裕のある中で個別の関わりを持てるとよかったと反省が残った。

次の日から、兄弟関係のあったうめ組（年長児クラス）ではビュンビュンごま作りが始まり1年生への関心が高まっている様子を見ることが出来た。同じ年長児クラスのさくら組ではうめ組のビュンビュンごまを目にする事で自分たちにも出来るようだと思ったりしく教師に作ることを求めてきた。誰かが回そうとしているととたんに自分もやりたくなるという姿が予想できたため、皆で自分のビュンビュンごまを作ることにした。デザインはそれぞれのイメージに合わせ、風糸を自分で通す事を提案する。千枚通しを環境の中に準備はしてあったが再度安全のために確認をし、

風糸を通りやすくするなど自由に使えるようにする。

作ったすぐからデザインよりもならしたい、まわしたいという思いがとても強くそれぞれ努力する姿も見られた。しかし自信のない子ども達にとってはハードルがとても高い活動のようであり、さすが1年生!と思うきっかけになっていたようである。

少しずつうまく回せる子どもが出てくると、一気に気持ちは盛り上がり、「これで合奏すればいいよね」などと言う話もでてきた。やはり見せて聴かせてもらった経験は大きく印象に残っているようだった。

ビュンビュンごまのハードルにはなかなか向かっていけないが、コップを使った楽器は子ども達の手になじみやすかったこともあり家庭で作り園での活動の中に持ってくる様子があった。またどんぐりを入れた空き容器のマラカスは簡単すぎて関心を引かなかったようであった。意欲をそそられなかったというべきであろうか。

その後もビュンビュンごまを回し楽しむ様子もあるがやはり個人の目標をしてはなかなか難しい様子が見られる。少しずつ回せるようになった子ども達に皆に披露する機会をつくり目標に向かうことを援助していつている。
＜11月5日＞

教師が2枚合わせたものを勢いよく回していると、これまで回せた子どもたちもその勢いの良さに引きつけられるようにまた作り始め、張り合わせたのりがまだ乾ききらず、勢いよく回るたびに顔にかかってしまうが、これもまた回っていることが実感できる事となり歓声をあげながら手が痛くなっても回し楽しむ。指から手、手から腕、両足にかけて……いろいろなところでチャレンジしたり2つのビュンビュンごまを同時に回そうとしたりする。こうした姿を降園前に友達に披露したりする機会を持ったり、関心が高まっている姿を捉え今まで作ろうとしてこなかった子どもに「○○くんも作ってみる?」と誘うと頷きすぐに作り始める。友達の回している姿を

しっかり見てあるためか、少しきっかけ作りをしてやると勢いよく回すことを持続し楽しむ。しばらくすると最初から回せるようになり「先生、見て!回ったよ!!」弾けそうな笑顔とともに声が聞こえた。

今まで回せなかった友達が次々回せるようになっていく姿に刺激を受け、それまで始めようとしなかった子どもたちも次々取り組むようになっていった。

＜11月14日＞

約2/3の子どもたちが回せるようになり、デザインを工夫し回したときの美しさに気付いたり、大きさを違えていくつも作ったりして回す楽しさを積み重ねていた。まだ回せない子どもたちも個々に関心を行動に表し、何度も何度もチャレンジする姿が見られる中、突然現れたビュンビュンごま名人のおじさんのアドバイスから、コマにパンチで穴をあけ勢いよく回し、ビュンビュンと勢いよく音を立て、それを見て周りの子どもたちも同じようによくなるコマを目指し穴をあけ回し始めたようだ。

教師は、テラスから大きな声で「せんせい!すごい音鳴るよ!」と呼ぶ声を聞き保育室に戻ると、「あのおじさんにいい音鳴るように教えてもらったよ。穴あけるといいよ!ほら見ててね。」と少し興奮したような様子で鳴らして見せてくれる。見ていた子どもたちも一緒に鳴らし始め、風を切って鳴るととてもよい音が周りに溢れ、気持ちが一気に盛り上がっていった。

＜12月2日＞

「みんな」でする事の楽しさが積み重なってきている。土日の休みを挟み、登園してすぐから今まで回せなかった子どもたち2人がすぐにビュンビュンごまに取り組む。いままで、朝くると友達が揃うまでビュンビュンごまを回したり、回せない友達にアドバイスをしたり手を添えたりして過ごしていたが、本日は回せなかった友達がすぐに音を立てて回し始めそれを驚き、感動とともに教師に伝える。先週末、きっかけを掴みかけていた事と

ビュンビュンごまをしっかりと手に持ち持ち帰っていった様子に予想はできていたが、やはり誇らしげに回して見せてくれるその姿に「やったね!!」と教師も大きな声をかけていた。

「これでみんなで回せるね!!」という言葉が子どもたちからわき上がり、「先生、お帰りの時みんなで回して合奏しようよ!」と気持ちが一つになっていった。

(3) 考察と今後の課題

①児童間交流の成果と意義

・小学生にとって：低年齢児との関わりの中で、より年長者としての自覚が集団的に揺れ動きながら経験される姿が見られた。たとえば「しっぽとり」の交流では「面倒を見たい」「やさしくしたい」と言う一方で「そんな簡単に面倒をみられない」などと反論されている。実際に園児達の意外な抵抗にあうと、「不利だ」「もうしない」「今度は人形劇を見せる」と反応している。年下の幼稚園児が相手であるからこそ経験されるその年齢なりの自我の揺れ動きであろう。こうした経験はすぐさま自覚的な肯定的な自己意識となるわけではないにしても、蓄積されればその重要な土台となることが予想されるものであり、少子化や遊びや生活の異年齢集団の崩壊、衰退という状況の中で貴重なものであろう。

また1年生の手作り楽器の演奏では「より質の高い演奏を聴かせたい」など自分たちをもっとひきあげたいという要求が生まれている。年少の子どもに対するものだからこそ生まれた主体的な活動と向上、達成への意欲、そして集団的実行という経験の持つ意味を深められる姿であった。

・幼児にとって：小学校生活（施設や人）へのなじみと希望が、年長者（の能力）へのあこがれが基盤となって遊びの展開が生まれた。たとえば、実践事例にあるように手作り楽器の演奏を見せてもらった幼児達はさっそくその一部のビュンビュンごまを真似て遊びの中に取り入れた。各人各様の取り組みから集団的なとりくみへと展開したその姿は、「あこ

がれ」の大きな意味を示唆している。

・幼児期から児童期を通しての表現意欲と活動の発達の姿をとらえていく手がかりが得られた。人形劇（4年生）や楽器演奏（1年生）で見られた集団的な表現意欲とそれらを鑑賞して自分たちもしたいという年長幼児達の表現意欲と活動の姿を通して、またそれらの前段階にある3、4歳児やより高い水準が予想される高学年児童の表現活動も今後観察され検討されれば幼児期、児童期にわたる表現活動全体の特徴や発達の道筋が見えてくる可能性がある。

②反省と課題

できるところから進めてきたが、まだイベントが中心であり、恒常的で全学年、全園児にわたるものではない。また一方が他方に働きかけるといって一方通行型が多く、共に共同の活動にとりくむことが少なかった。それぞれの取り組みの意義と成果を確認しながら拡充していくことが必要である。

2. 教師間の交流

(1) 経過の概要

2001年度からの取り組みの経過の概要を以下に示す。（ ）内の数字は参加教員数である。

<2001年>

- ・6月1日：児童交流打ち合わせ
- ・10月26日：児童交流打ち合わせ
- ・12月19日：懇談会（小6 幼6）

<2002年>

- ・2月16日：幼稚園公開研究会（小4）
- ・3月12日：公開研究会の保育説明と意見交換
- ・3月28日：神戸大学調査（小2 幼2）
- ・5月21日：小学校授業参観「生活科一種まき」（幼2）
- ・5月27日：小学校授業参観（保護者授業参観日）（幼4）
- ・10月31日：大阪教育大学附属幼稚園公開研究会（幼3 小3）
- ・11月16日：幼稚園公開研究会（小5） 共同のパネルディスカッションのパネラーとし

て小学校教員2名が参加。他に小学校教員3名が参加。県内の小学校教員も数名参加。

(2) 成果と問題点

① これまでも行事への参加など中心に交流がなされてきたが、「幼小連携」というテーマを意識しながら計画的に交流の機会を作ることにより、相互の保育教育内容についての理解が深められてきている。とりわけ懇談会(01/12/19)や公開研究会後の説明反省会(02/3/12)では、具体的な内容について交換することができ、知らなかったことや違いと共通点が見え始めている。たとえば2001年の12月19日では、「コマ回しでは園児の方が上手な子がいると実感した。1年生と年長児には極端な差はない。」などの具体的な子どもの姿についての交換があった。それ自体きわめて部分的なことがらについてに過ぎなかったが、「今までは幼稚園で何をしてたのかわかっていなかった」状態を考えれば、そのような機会のなかったこれまでと比べ、体系的な実態理解の土台を作る大きな一歩が踏み出されたといえる。また共同のパネルディスカッション(02/11/16)では、特に児童間交流の成果が共有され、児童観、保育教育観を交流し共有していく手がかりが得られた。

② まだイベント中心の児童間交流や公開研究会など、特別な機会に合わせて交流がされているにとどまり、恒常的なシステムとしての交流あるいは協議に発展させていくことが求められる。参加者も、大きな機関であるため必然的ではあるが小学校では少人数にとどまっている。さらに、単なる交流や協議にとどまらず、一定期間の制度的な相互派遣システムについて展望していく必要があるだろう。

③ ここで児童間交流で見られた子どもの姿を共通の基盤として教師間の交流をすることの意味は大きいと思われる。児童間交流で見られた子どもの姿そのものも幼小それぞれの教員にとって新鮮であったが、それらを共有していく過程で両者の基本的な子ども観や教育

保育観をリアルな形でつきあわせることができる。

たとえば代表的な事例で報告した「しっぽとり」では、4年生が意外な幼稚園児のルール違反まがいの「抵抗」に直面し最初の幼稚園児のイメージの変更を余儀なくさせられた。そして次に自分たちの「不利」を感じ人形劇を見せる活動へと展開した。ここでは子どもがもつ「自信」や「誇り」の、おそらく5年生、6年生とは違った4年生なりの発現が見られたと教師たちに感じとられたのであり、そうした発現が成長や発達に意味を持つことが共有されたのである。

また人形劇の発表や手作り楽器の演奏と鑑賞という交流で、それぞれの年齢段階で特徴的な「表現意欲」や「表現活動」の現れが議論となった。そこから「表現」を軸とした幼小の連携した教育課程がリアルな形で展望されてくるだろう。そのほかにもまだ断片的なレベルに過ぎないが、ものを作る活動や生き物との関わり、コマ回しなどの技術的達成の遊び、という領域でもそうした展望を生み出していくことは可能なようである。

以上のように児童間交流を進めながら子どもの姿を共有することによって教育課程改革への手がかりをえるという過程は今後の実践的研究の有力な方法として位置づけることができよう。これまで、教師や保護者等へのアンケートの実施や学指導要領と幼稚園教育要領の比較検討などで幼少の連関の問題が取りあげられてきた(木村 2001、: 福田ほか、1985: 腰山、1985 など)。しかしながらたいは「予想以上に両者のずれが大きい」ことや問題が山積していることの指摘にとどまっている感がある。実際に問題解決を図っていくためには、遠いようでも現実の子どもの姿の共有から始めていくことが有効な道ではないかと考えられる。

III. 今後の課題

本稿で紹介した実践は、研究協議会の設立を

準備していく過程とその発足直後のものである。したがって計画と課題を十分明確にしたうえで行ったというより、まさに「やれるところから」の精神でとりかかってきたものである。その意味では当然目的意識性や課題構造、計画の体系的性が練り上げられる以前の「実践」でもある。しかしながら、学部、幼稚園、小学校の教員が同じテーブルに着き共同で取り組みを始めたという意味では貴重な一歩でもあった。この取り組みの枠組みを今後も継続し拡充していく必要があろう。

この実践の範囲内で今後進めて行くべき課題はすでに述べたように、児童間、教師間交流のシステム化と内容の拡充である。これは現在も実践的な取り組みとして進行中である。

さらにその範囲を超える実践研究全体の枠組みについては、課題構造全体として冒頭に掲げた。そのうち当面取りかかるべきものの一つに、教育課程の接続連携について幼小両者の実際の教育内容の突き合わせと項目化作業がある。幼稚園では主軸となる子どもの遊び活動を小学校ではどのように位置づけるか、家庭教育等の実態をふまえて様々な生活習慣や年齢にふさわしい社会生活上の技能や態度の形成（従来の狭い意味での「しつけ」に相当する部分、たとえば挨拶、傘のしまい方など細かな問題も含めて）の問題、学習や授業など学校生活にふさわしい生活習慣、そして多様な学習への興味、関心及び学習されるべき内容、自立した民主的な人間として時代と年齢にふさわしい道徳や感性を形

成する問題など、多岐にわたる教育内容と方法について幼少の教育課程について実態把握を行う作業がまずは必要であろう。

問題構造は広範で課題は大きいができるところから進めていくつもりである。

文 献

- 木村吉彦 これからの幼小・小中連携について
考える 教育創造 137 号 高田教育研究会
8-12
- 神戸大学発達科学部附属幼稚園・附属明石小学校・附属明石中学校 2001 研究開発実施報告書 別冊参考資料
- 腰山豊 幼・小一環教育の推進に関する基礎研究(3) 秋田大学教育学部教育研究所研究所報 第22号 110-119
- 鈴木正幸・戸江茂博・山本克典 1989 幼稚園教育課程の変遷に関する考察(1) 神戸大学教育学部研究集録 題83集 325-339
- 福田啓子 1985 幼稚園教育と小学校教育の関連について〔Ⅱ〕 東京家政大学研究紀要 第25集 79-91
- 三重大学教育学部附属幼稚園 2002 「豊かな人間関係をめざして・子どもが変わる教師が変わる幼少の連携 ―子どもの側に立って生活を見直そう―

※本研究は2002年度三重大学教育学部重点経費の補助を受けて行われたものである。